離宮か、寺院か？

樋ノ口遺跡は，木津川市と相楽郡精華町にまたがる奈良時代の遺跡です。この遺跡の始まりは恭仁宮段階の瓦が出土していることから730年代で、終わりは中国製白磁が出土していることから平安時代初期と思われます。遺跡の中心部分は未調査ですが、遺跡の西端部の調査をおこない、南北方向の築地と２棟の掘立柱建物跡を検出しました。築地周辺から瓦が出土していることから築地には瓦が葺かれていたことが想像できます。２棟の建物のうち、１棟は２間×２間で遺跡の南端に建てられており、楼閣（ろうかく）とも推定されます。恭仁宮の瓦とともに、757年以降に平城宮の瓦に似せて地元で作られた瓦が多量に出土しており、この時代に大きく改修されたことがわかります。

この遺跡からは多量の奈良三彩や緑釉陶器、さらには多量の平城宮式の瓦などが出土し、これらの遺構や遺物の内容から離宮か寺かとの論争が繰り広げられました。

足利健亮氏による現代の地名や『興福寺官務牒疏』の記載をもとに「山田寺」であるとする意見もありますが、創建瓦が平城宮のために用意されたもので寺院用ではないこと、１町方格の規模が確保できる地形ではないことから、不定形な離宮がふさわしいと考えています。765年に孝謙天皇が行幸した遺跡かもしれません。

（伊野近富）

樋ノ口遺跡出土の施釉陶器